

## 第三十三章 鬼風

その昔、日本は中国大陸を征服した中華元国に何回か攻められた。ところが不思議なことにいずれも台風の影響によって元国軍は全滅する。鬼風と呼ばれたが、何度攻撃しても鬼風に阻まれてついに中華元国は日本攻撃を諦めた。

歴史は繰り返すではないが、同じことが起こる。

度重なる西側諸国の首脳や国会議員が鯛湾を訪れるので面子を重んじる中華民国はついに鯛湾上陸特殊軍事作戦を開始する。中華民国にすれば中華民国と鯛湾は一つの国だと主張しているので宣戦布告ではなく特殊軍事作戦と呼んだ。ソシアのプチレンコン大統領に教えてもらったのかも知れない。

内政問題だとして西側諸国はもちろんどこの国の意見や批判を無視して電光石火のごとくすべての艦船を動員して鯛湾島を取り囲む。

中華民国が一番恐れていたのはザットンだった。一撃で空母を沈没させられた。残り二隻の空母を失いたくなかったから海軍は数で対抗しようとした。

空母を動員しなくても鯛湾との距離は近い。沿岸空軍基地から爆撃機と戦闘機を発進させればよい。戦闘機に守られた爆撃機に鯛湾の軍事拠点を、場合によっては戦意を喪失させるた

めに住宅やインフラ設備を爆撃させてから空挺部隊を送り込めばいい。

一方、鯛湾総統は若い大臣を積極的に採用していたので臨機応変に対応する。大臣の平均年齢は三十歳前後。防衛大臣は実戦経験はおろか軍隊経験もないがコンピュータのシミュレーションゲームでは世界一の腕前を持つ。

確かに中華民国は独立戦争や革命で数多くの戦争を経験してきた。しかし、今となれば五、六十年以上も前の出来事なので経験者はかなり高齢だ。寿命が延びたと言っても戦争のことは思い出したくないし忌まわしいことだからしゃべりたくもない人がほとんどだ。戦争とはそんなもので誰もが不幸に陥るだけのものだ。もちろん戦争になれば勝たなければならない。だから権力者は「弱腰」にはなれない。そして英雄になりたい。

特に独裁者はこの「弱腰」批判に弱い。もともと独裁者になるためには絶えず「強腰」でなければ務まらない。これが墓穴を掘る原因なのに、どんな独裁者も気付くことはない。端から弱気な独裁者というものは存在しない。拍手喝采が欲しいから強気一辺倒だ。しかし、うまく行かないこともあるし飽きられることもある。

家族の長である父親ですら妻や子から疎んじられる。ましてや億単位の人口を持つ国の長である大統領や首相という人間は軍隊という名の妻や国民という名の子から絶対的に慕われるなどあり得ない。だから独裁者は軍という妻を完全掌握する。しかし、戦争で負ければ離婚となり一巻の終わりとなる。

鯛湾の防衛大臣が大きな口を開けてハンバーガーに食らいつく。ザットンで面白いように中華明国の大型軍艦を斜めに切り裂く。怪獣パンダも駆逐艦やフリゲートをカミソリのような背びれで前後あるいは左右に分離する。

\*

ザットンも怪獣パンダには、巡洋艦やミサイル駆逐艦などの攻撃はまったく効果がない。まづミサイルはなかなか命中しない。魚雷よりも速いので役に立たない。ならば速射砲でと攻撃しても効果がない。装甲が分厚いのではない。砲弾が吸収されて吐きだされてしまうのだ。

ザットンや怪獣パンダはスクリーンで航行するのではなく身体全体で自由自在に動き回る。もちろん大砲やミサイルと言った武器は持っていない。サメのように鋭い歯を持っているわけでもない。

中華明国空軍からの攻撃に対してハリー・マウス戦車が対抗する。ハリー・マウスの超極細の対空針型ミサイルの威力は飛び抜けているし、その数はハリネズミの針のように無限に近い。防衛大臣から陸上舞台の指揮を任されたさらに若い防衛副大臣が複数の大型モニターを見つめながら高機能三次元ジョイスティックとフットアクセルブレーキをコントロールしながら餃子を口に放り込む。まるでゲームだ。すべてのミサイルが鯛湾に到着する前に破壊される。

「完璧！」

周りから拍手喝采が巻き起こる。しかし、副大臣が首を横に振りながら座り直す。

「まだまだ」

鯛湾島に砂浜は少ないが、その少ない砂浜を狙って中華明国の上陸用舟艇が突つ込む。すぐさまコバルト・カウが対応する。沖合の艦船にはイエロー・タイガーが攻撃を仕掛ける。すべてを副大臣一人がコントロールする。

「フー」

副大臣が大きく息を吐き出す。そして額の汗を甲で拭う。

「もう少し室温を下げてくれ」

冷たい炭酸水を口にほうばる。はじける炭酸が心地いいのか唇を閉じたまま微笑む。そしてモニターを確認する。

「核弾頭の発射に用心しろ」

副大臣はレッド・エレファントの砲塔部分を本体から切り離して上昇させる。もし中華明国から核弾頭らしきミサイルが発射されたらすぐさま迎撃するつもりだ。しかし、兆候はない。すでに中華明国は戦闘意欲をなくしていた。

副大臣の沈着冷静な対応に静かな拍手が送られる。副大臣の表情が急変して幼い少年のように明るくなる。

「なんとかなった。よかった」

それもそのはず、副大臣は小学生だった。